
花に嵐 k i s s o f f i r e

コエ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

花に嵐 k i s s o f f i r e

【ノート】

N0096C

【作者名】

ユエ

【あらすじ】

「また恋してよ、あたしが困るからさ」
恋物語。 桜と和歌で綴られた

花に嵐 k i s s o f f i r e

(前書き)

ふとしたことで、恋の火が灯るかもしれません

「うう、えつく」

教室の後方、窓際の席に突っ伏しながら男が泣いていた。その横に佇む女は慰めるでもなく、窓辺に咲いている花を眺めながら黙って傍に居続けている。人が泣く理由はいくつもあるが失恋もよくあることだ。

「うっ、ぐす。決めた！俺はもう恋なんかしない」

学ランの袖で涙を拭いながら顔をあげ、またいつもの決意を口にする。失恋の度にこうだった。

それを横目に、女は窓を開けた。少し冷たい春先の空気が頬を撫でる。外では風に散らされた花が空を舞い、薄紅の淡雪が降っているような夢幻の景色がひろがっていた。そのひらひらと漂う花びらに、女は自分の想いまで映っているような気がした。

近くの枝先に咲いた花に指を伸ばすと、ふいに窓から花びらが舞い込んで男の机に落ちていった。

「桜、か。あのさ、今日の古典であつたじゃん」

男が唐突に、今日の古典でやつた伊勢物語を話題にしてきた。

「えと『世の中に たえて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし』ってやつ」

ただたどしい調子で和歌が詠まれる。その色も艶もない口調は、女の口元に笑みをのぼらせた。

「訳は？」

試すような声音が教室に凜と響く。男はあやふやな記憶を探り、「この世に桜がなかったら咲いた、散つたと一喜一憂しなくて済むのになあ、だっけ？」

と何となくな訳を言った。女から溜息のような笑いが零れた。

「とにかく！ そうなんだよ。桜がなかったら期待しないようにさ、恋しなかったら泣かないで済むんだよ」

今回は少し応えたのか、柄にもなくうしろ向きなことを言っている。例えが振られること前提だった。

女は興味なさ気に装いながら花を弄び続けた。どうせいつもの立ち直る儀式みたいなものだ、と胸のうちで独りごちる。

「恋が人生の全てじゃなあーい！ 俺は今日からストイックに生きてやる！ まずは」

こぶしを振り上げ、己の禁欲の誓いを次々と列挙していく男に、「似合わない」

戯れていた花から顔を上げ、女が苦笑しながら呟いた。キャラじゃないと思っただのか、男も苦笑いしながら頬を掻いている。

「やつぱり？」

「女好きのままでないよ、業平なりひらみたいになさ」

男の顔に『誰それ』と書かれてあるのを読み取るように、

「さっきの歌の詠人」と告げる。

男が納得したように手を打ち鳴らした。

「おお、なっちゃんも女好きか。どうりで共感する歌だと思っただぜ」有名歌人にみかんジュースと同じあだ名を付け、ひとりで愉快そうに笑った。打たれ強いのか、もう免疫があるのか。その表情に、さっきまでの失恋の色は影を潜めている。

そうやって男はひとしきり笑うと、おもむろに席を立った。

「また話聞いてもらっちゃったな。すっきりした、サンキュー。俺さ恋は当分いいやあ」

女は掛けられた言葉を複雑な気持ちで受け取りながら、肩越しにヒラヒラと片手を振った。なんでもない、とでもいうように。

何気ないその仕草に感謝するように、男が更に言葉を重ねてくる。「ホントお前って、いい『友達』だよな！」

パキン。

一瞬にして理性が弛緩したような感覚に女は襲われた。心に暗い翳がさす。思わず指に力がこもり、弄んでいた花まで手折ってしま

った。

「どうした？」

向き直った女の顔から感情の色は窺えない。ただ黙って、手折った花を左の人指し指と中指で挟み口元に寄せている。

「……散ればこそ いとど桜はめでたけれ 憂き世になにか久しかるべき」

静寂を破り、澱みない調子で和歌が諳んじられる。口唇に淡紅色の花が控えめに寄り添い、文字通り花唇の風情を思わせた。

「なんだ、それ？」

男は戸惑いの表情で伺ってくる。

「さっきの歌への返歌」

「どういう意味だ？」

女の黒曜の瞳に男が映りこんだ。

「桜は惜しまれて散るからこそ素晴らしくて、この世に永遠なものは何もない、ってこと」

平易に噛み砕いた言葉を男に返すと、思案顔で腕を組んだまま頷いていた。それを見ながら、

「だから……」

女が歩を寄せる。

「また恋してよ」

願うようにそう囁き、花に口づけてみせる。

「あたしが困るからさ」

言葉が終わる刹那に、手にした花が男の唇に押しあてられた。艶やかな微笑みも添えられて。

「っん！」

こんなことをしたのは、桜吹雪に魅せられたからか春嵐に想いを煽られたのか。

それとも、こいつのせい？

自嘲めいた笑みが女に浮かぶ。男は困惑した表情で、よろめきながら一歩下がった。花びらが一片、その唇を彩っている。

女が想いの言葉を紡ぎだそうとした瞬間、教室のドアが急に開いて担任が入ってきた。

「何してるんだ？」

担任は訝しげな顔で教卓の上にあったプリントをとり「早く帰れよ」と、念を押しながら出て行った。どちらともなく吐息が漏れる。興を削がれた女は、伝えられなかった言葉を胸に仕舞い、それから伏し目がちに、

「残念」

と言葉を洩らす。

スカートの裾を翻し、そのまま男の脇を抜けようとした。でも衝動的に、男にその細い腕を掴まれてしまう。

「な、何であんな……」

まだ、わかんない？

振り返った顔が、馬鹿な奴ほど愛しい。そう言っている。

「教えてやらないよ」

瞳を和ませながら男の上唇に残る花びらを指先で掬い、それを口寄せた。見せつけるかの様に。そして微笑みだけを後に残して、教室から出ていった。

窓の外では花嵐が桜を舞い散らし、花びらが宙を彷徨っている。それは揺らく想いの恋にも似て。

(後書き)

こんにちは、ユエです。

この作品は、今年の桜舞う季節に書いたものです。

今作ではモチーフとして「桜」と「和歌」を使用しております。

また、作品創りにおいて少し古典も意識してみました。

色々と初挑戦が多い作品となっております。

よろしければ、ご意見ご感想をお聞かせください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0096c/>

花に嵐 kiss of fire

2008年11月7日06時31分発行